国文法（＝学校文法、伝統文法）、日本語文法、記述文法、日本語教育文法の共通点と相違点

－現代語の語と単語－

日本語文法研究史：代表的なもの

○国文法の系譜＝国学 ⇨ 小・中・高校の教科書、国語辞典へ　　漢字と仮名で表記するしかなかった時代

冨士谷成章（1738～1779）、鈴木朗（1764～1837）

本居春庭（1763～1828）：『詞八衢』（1806）

大槻文彦（1847～1928）：『広日本文典』（1897）

橋本進吉（1882～1945）：『国語法研究』（1948）

時枝誠枝（1900～1976）：『日本文法 文語篇』（1950）、『日本文法 文語篇』（1954）

○それにかわる文法学説：日本語の記述と分析

山田孝雄（1875～1958）：『日本文法論』（1908）

松下大三郎（1878～1935）：『標準日本口語法』（1930）

↓日本語をローマ字で表記してみえてきたこと

佐久間鼎（1888～1970）：『現代日本語の表現と語法』（1936）、『現代日本語法の研究』（1940）

三尾砂（1903～1988）：『話し言葉の文法（言葉遣篇）』（1942）

奥田靖雄（1919～2002）：『ことばの研究・序説』（1985）

鈴木重幸（1930～2015）：『日本語文法 形態論』(1970)

生成文法（Generative grammar）の影響をうけた文法

〇外国人研究者の目からみた日本語の文法

João Rodrigues（1561～1633） 池上峯夫訳『日本語小文典』（1620）

Bernard Bloch（1907～1965）*On Japanese* A.R.Miller, ed (1970)

Samuel E. Martin（1975） *A Reference Grammar of Japanese*

文法理論の対照

	国文法		言語学的な文法
〇目的・目標	国語教育	⇔	日本語研究と非日本語母語話者に対する日本語教育
	‖		‖
	古典の解釈、現代語の理解と表現		現代語の理解と表現
	規範	⇔	規範と現実
	‖		‖
	食べられる、見られる、着られる		食べられる、見られる：食べれる、見れる
	理論が固定している	⇔	理論は発展しつつある

〇日本語の単位と品詞論　語と文節（橋本進吉）　⇔　単語

自立語＋付属語　　語幹＋語尾

・自立語：活用する＝**用言**

‖

動詞・形容詞・形容動詞

活用しない＝**体言**

‖

名詞・代名詞・数詞

副詞・連体詞・接続詞・感動詞

・付属語：活用する＝助動詞

：活用しない＝助詞

〇名詞（代名詞）　**／私は　本を　読んでいます。／**

私＋は＝２語　⇔　「私は」で１単語

‖　　‖

名詞＋助詞　　名詞の語形変化　名詞と語尾を切りはなさない

○ 動詞

活用	⇔	語形変化
‖		‖
未然・連用・終止・連体・仮定・命令		「読む」という基本形から派生させる
未然形：読–**ま**＋ない		「読まない」は「読む」の否定形
読–**も**＋う		「読もう」は「読む」の意志・勧誘形
連用形：読–**み**＋ます		「読みます」は「読む」の丁寧形
（音便形）：読–**ん**＋で		「読**ん**で」は「かわり語幹」、中止形
終止形：読–**む**		「読む」は述語で現在・未来形
連体形：読–**む**		「読む」は「読む」の規定形
仮定形：読–**め**＋ば		「読めば」は「読む」条件形
命令形：読–**め**		「読もう」は「読む」の意志・勧誘形
読ん–で–い–た		「読む」の継続相・過去形
活用形＋助動詞＋補助詞＋助動詞		

○ 形容詞類

	／おおきい　元気な　純粋の／	
形容詞	⇔	「－い形容詞」
形容動詞	⇔	「－な形容詞」
名詞＋助詞	⇔	（「－の形容詞」三尾砂）

／あの　ある　いわゆる／

連体詞（自立語：活用しない）　⇔　連体詞

規定語（宮島達夫）：動詞「ばかげる」＞「ばかげた」

／おなじ／をどうみるか

‖

おなじ（連体詞）　おなじく（形容詞）　おなじだ（形容動詞）

○ **副詞**＝自立語：活用しない＝動詞・形容詞類を修飾する

ゆっくり　はっきり　すこし　やがて　なぜ ／ 擬音語：ツルツル　ピカピカ　ガタンゴトン　スカッと

陳述副詞＝はなし手の気もち・判断をあらわす

きっと　たぶん　かならず　ぜひ　もちろん

○ **接続詞**＝自立語；活用しない＝文と文の関係をあらわす

しかし　つまり　そして　たとえば

○ **感動詞・間投詞**＝自立語；活用しない＝はなし手の気もち、呼びかけ、応答

やあ　おい　もしもし　はい　いいえ

◎国文法の助詞：付属語　⇔　言語学的文法では「を格の名詞、に格の名詞、はだか格の名詞、etc.」

〈文の構造に関与〉

格助詞：に　が　を　へ　の　と　から　より　で　や　にて

副助詞：さえ　まで　ばかり　のみ　だけ　は　か　こそ　だに　すら

接続助詞：ば　と　ても　けれど　が　のに　ので　から　し　て・で

とりたてのかたち　に：には、にも　まで：までは、までも　etc.

助詞の連続　～からさへも　～までへも　etc.

〈文全体の意味に関与〉

終助詞：か　かしら　な　ぞ　ぜ　とも　よ　の　わ

間投助詞：な・なあ　ね・ねえ　さ

◎助動詞：付属語

助詞と同じく、国文法では付属語 ⇔ 言語学的文法では語尾

〈国文法の分類〉

受身・尊敬・自発・可能：れる　られる

使役：せる　させる　しめる

時＝過去・完了：た

未来：う　よう

推量：らしい　べし　まい　ようだ　みたいだ

打消：ぬ　ない

希望：たい　　たがる

断定：だ　　です

伝聞：そうだ

様態：そうだ

比喩・例示：ようだ　　みたいだ

◎補助動詞：～みる　　～しまう　　～いる　　～もらう　　～あげる　　～くれる

Analysis of Sentences

－文の分析－

最初におぼえること：

（1）用言（動詞・形容詞・形容動詞）と体言（名詞・代名詞）

（2）活用形をおぼえる

未然形（みぜんけい）	連用形（れんようけい）	終止形（しゅうしけい）	連体形（れんたいけい）	仮定形（かていけい）	命令形（めいれいけい）	
tabe - nai	tabe - te	tabe - ru	tabe - ru	tabe - reba	tabe – ro	語幹末の母音が一つ＝一段活用
tabe - you						
kaka - nai	kai - te	ka - ku	ka - ku	ka - keba	ka – ke	語幹末の母音が五つ＝五段活用
kako - u						
shi - nai	shi - te	su - ru	su - ru	sure - ba	si – ro	さ行変格活用
shi-you						
ko - nai	ki - te	ku - ru	ku - ru	ku - reba	ko – i	か行変格活用
ko - you						
takakaro - u	taka-ku	taka - i	taka - i	takakere - ba	(takakare)	
	takakat-ta					形容詞
genki - darou	genki - de	genki - da	genki - na	genki - nara	－	形容動詞
	genkidat - ta					

（3）文節にわける、品詞分解する

「太郎は元気な子供です。」 Taro is a lively kid.

文節（bunsetu）：Tarowa∨genkina∨kodomodesu . ∨= pause

品詞分解（Part of speech）：

Taro+wa = noun + particle

genki+na = an inflected form of adjectival verb+ending

kodomo+desu = noun+ auxiliary verb

「昨日あなたは図書館で本を読んでいましたか。」 Were you reading books in the library yesterday?

文節：Kinou∨anatawa∨tosyokande∨hono∨yondeimasitaka .

品詞分解：

Kinou = noun

anata+wa = noun + particle

tosyokan+de = noun + particle

hon+o = noun + particle

yon+de+imasi+ta+ka ＝verb + auxiliary verb + subsidiary verb + auxiliary verb + particle

書く＝か＋く

書いて＝「書く」連用形の音便形＋助動詞「て」

書か・され・まし・た＝「書く」の未然形＋受け身の助動詞「される」の連用形＋丁寧の助動詞「ます」の連用形＋過去の助動詞「た」の終止形